後年集 戦70特

戦争の記憶を後世に

～語り部から子どもたちに～

市では、戦争の悲惨さや平和の大切さを伝える人を「平和の語り部」として登録し、市内の小中学校へ学習会の講師として派遣する「平和の語り部」派遣事業を行っています。その平和の語り部である中山 淳さんが5月22日、味酒小学校で戦時中の訓練や松山空襲に遭ったことなど、自らの戦争体験を語りました。今回はその時の中山さんと味酒小児童らの話を紹介します。

戦時中の体験談を熱心に聞く味酒小児童ら

午前は授業や訓練、午後は基地で作業、自由な時間はなし

私が生まれてから中学3年生まで、日本はずっと外国と戦争を続けていました。

小学5年生だった1941年12月8日、日本が真珠湾攻撃をしてアメリカやイギリス、フランスなどの連合国と戦争状態に入りました。

皆さんはこの戦争を太平洋戦争という名称でこれから学校で習うと思います。

翌年の小学6年から中学3年までの間は特に激しい戦争状態になりました。

中学時代の制服は陸軍の兵隊と同じようなものでした。カーキ色の軍服の様な制服で、足にはゲートルという分厚い包帯のようなものを脛から下に巻いて登校していました。

学校では戦争のための訓練、いわゆる「教練」という授業があり、今とは違って、自由な教育を受けられませんでした。

当時、松山空港は海軍航空隊の基地で、今の3倍近い広さがあり、零戦や大きな爆撃機が戦場に飛んで行っていました。

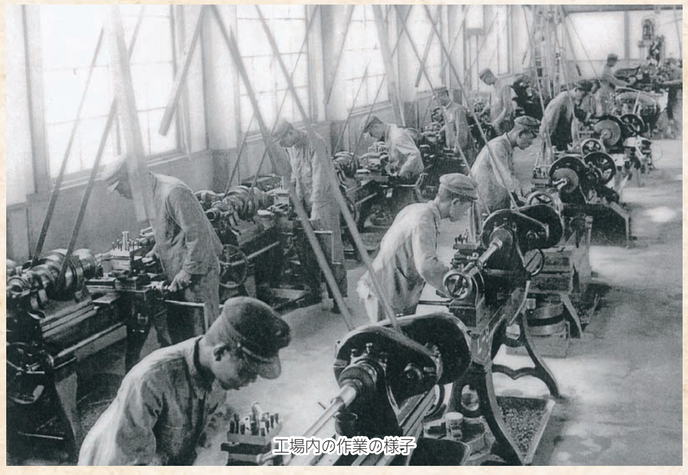
空港の周りにある会社や工場も全て海軍の基地になっていて、中学2年生の時には作業のため、それらの基地に駆り出されていました。

午前中に勉強をしていましたが、訓練を含めたもので、午後には基地で作業があり、自由な時間はありませんでした。

基地では、掩体壕（えんたいごう）という高い性能の戦闘機を格納する施設を造る作業がありました。教室の倍以上の広さがある場所に、コの字型に畑の土を積み上げます。土の入った入れ物を担いで、積み上げていく、そんな作業を、昼食を食べてから夕方までずっとしていました。

南吉田町に残る掩体壕（コンクリート造り）

当時婦人会活動の中心であった防空演習（昭和18年ころ）


工場内の作業の様子

子どもたちの声が語り部を続ける励みに

これまで約13年、市内の小学校で語り部をしています。話を聞いてくれた後、子どもたちが感想文を寄せてくれますが、「戦争はぜったいダメ」「平和のためにがんばりたい」など、子どもたちが平和を大切にする気持ちを強く持つ決意を見ると、語り部を続けていくことの大きな励みになります。

子どもたちには将来、そのような気持ちをずっと持ち続け、私たちが体験した戦争を二度と経験しないような、平和な社会をつくってもらいたいと思います。

平和の語り部

中山　淳さん

昭和5年5月生まれ。「平和の語り部」派遣事業が立ち上がった平成14年から語り部として活動を続ける。

新居浜の軍事工場で爆撃に遭う

中学3年生の時には、新居浜の軍事工場へ送られ、8人1部屋の寮生活をしながら働きました。

今でこそ土日は休みですが、当時は「月月火水木金金」という歌があったように、1週間休み無く、毎日軍事工場で働いていました。勉強することは全くできず、「戦争に勝つまでは我慢しなさい」と、一日中工場で働いていました。

新居浜の工場は危険と隣り合わせでした。ある日の昼休み、作業所の隣の建物で弁当を食べていると、大きな爆発音がしました。外に出てみると、先ほどまで私が作業をしていた場所が薬品による爆発事故で跡形もなく吹き飛んでいたのです。爆発が10分早ければ、私は死んでいたでしょう。

またある時は、隊列を組んで工場へ向かっていると、「警戒警報」が発令され、町中でサイレンが鳴りました。攻撃の標的となる工場にいては危ないので寮に戻りましたが、「空襲警報」に切り替わり、私たちは防空壕に避難しました。

しばらくして空襲警報・警戒警報が解除されたので防空壕から出た途端、アメリカ軍が投下した爆弾が落下。目の前が真っ赤になった瞬間、私は突風で吹き飛ばされました。

金属の断片が飛び散り、私の友人3人が大けがをしました。破片が貫通し、至る所から血が噴き出ていました。幸い命に別状はありませんでしたが、完治するまで2年もかかりました。爆弾は恐ろしいものだと身に染みて分かりました。

生石国民学校での軍事訓練（昭和18年ころ）

松山大空襲、無数の火の玉と大雨が降ったような音は今も忘れない

堀之内の北には練兵場がありました。銃弾から身を守るための塹壕（ざんごう）が掘られ、鉄条網が張り巡らされ、グライダーの練習場もありました。訓練してある程度戦えるようになった人は、兵舎を出発し、隊列を組んで松山駅から汽車に乗って戦場へ赴いていました。

だから、戦争とは遠い所に行って、兵隊同士が戦うものだと考えていました。

昭和20年7月26日、松山大空襲が、その考えを一変させました。

アメリカのB29爆撃機が多数押し寄せ、無数の焼夷弾を落としました。消防車すら燃えてしまい、消火する人がいなかったので、家の柱は一本も残らず、あたり一面が見渡せる状態まで燃えてしまいました。

焼夷弾は全てを焼き尽くすための爆弾です。厚さ約2、3ミリ、重さ約3キロの筒の中にドロドロの油が入っています。これがB29から38本の束で落とされ、300メートル上空で破裂し、火が付くような仕組みになっていました。大雨が降ったような音で、火の玉が一斉に落ちた様子は今でも記憶に残っています。

焼夷弾は着弾すると、底についている爆破装置が起動し、中から火の付いた油が飛び出す仕組みになっていました。当時はほとんどが木造住宅で、壁やふすまに火のついた油が飛び散り一瞬で燃え広がります。

目の前に焼夷弾が次から次へと落ちてくる中、両親に「弟と妹を連れて早く逃げろ」と言われ、町中を逃げ回り、重信川と石手川の間の農道にある水路の溝までたどりついたことを覚えています。その間も焼夷弾がどんどん落ちてくるので、生きた心地がしませんでした。

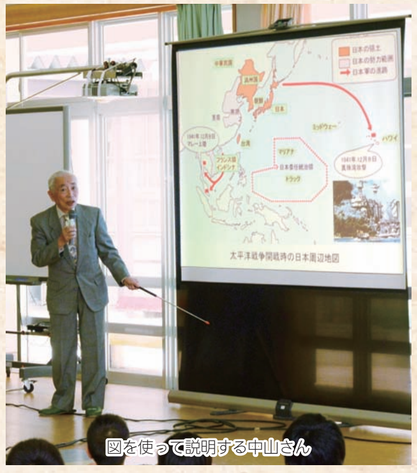
おびえきった妹をかばいながら、何とか3人とも逃げ切ったところで、松山総合公園の山に火の玉がいくつも上がりました。それが花火の様に見え、怖さを通り越してきれいだと感じるほどでした。

松山空襲では老若男女問わず500人以上の死傷者が出ましたが、これからの近代戦争では兵隊だけではなく、戦争に直接関係ない人、自分の大切な人も被害に遭ってしまいます。

そうならないように、皆さんは平和のために、戦争に巻き込まれないようにするために、勉強を頑張ってください。

空襲全体図　赤い部分は空襲で被害に遭った箇所

戦時下の中学生による軍事訓練



図を使って説明する中山さん

戦争はいけない　平和であってほしい

中学生なのに、遊びにも行けず軍事工場で働いたり掩体壕を作ったりと、戦争のためにずっと働いていたことに大きな衝撃を受けました。また中山さんが体験した松山空襲の話を聞き、焼夷弾は本当に恐ろしいと思いました。おじいちゃんやおばあちゃんからも、戦争が終わった後は食べるものもなく、大変な思いをしたという話も聞きました。

戦争はいけないと思うし、平和であってほしい。世界では今でも戦争が続いている所があり、残念だし、同世代の子どもを助けてあげたい気持ちです。今日聞いた戦争体験を忘れず、戦争のない平和な社会をつくるためにこれから頑張りたいです。

（左から）乗松　龍くん、伊予岡知希くん、大内優弥くん、永野　大（そら）さん、今井栞里さん